

## 加耶考古学の進展と加耶史研究の現況

田中俊明

こんばんは。田中俊明でございます。よろしくお願いたします。タイトルは「加耶考古学の進展と加耶史研究の現況」という、これを聞けばすべてがわかるというような感じになっていますが、実際には時間のこともありまして、その一部、さわりだけという感じでお話できればと思います。

そもそも加耶考古学、加耶史をタイトルにしていますが、先ほどご紹介のあった末松保和先生のご著書は『任那興亡史』という著書です。任那と言うのは、その加耶に当たるのだというような理解もあります。実は置き換えられる言葉ではないのです。ここで加耶といっておりますのは大体四世紀から六世紀なかばにかけて、図1にみられますよ

うに朝鮮半島の南のほうで興亡した小さい国の集まり、小国群です。加耶諸国と呼べるかと思えます。それが「任那」と呼ばれたこともあると言ってもいいのですが、それは実は『日本書紀』の独自の用法で、本来「任那」というのはひとつの国の名前、加耶の国の中のひとつの国、地図の東南の端、朝鮮半島の東南の端に現在は釜山という大きな町があります。その釜山の隣の金海市に「金官」という国があり、この国の別の名前が「任那」です。

このひとつの国の名前が「任那」なのですが、位置的に東南の端にあるため、古代の日本とは非常に深い関わりがありました。そうした関係もあって、任那国の名前が少し広がって用いられるようになっていくということで、ただ



わたしたちの世代は、そういう教育を受けてきた世代です。

そのことにもう少し触れますと、そういう考え方、古代の日本が朝鮮半島に植民地を持っていたという考え方は戦前からあるのですが、戦後も変わることなくその考えが支持され、誰もが認める考えとして続いてきました。それが変わるのはい九七〇年代です。一九四五年の解放後もその考え方が続いてきたのです。当たり前のように。その考えを変えるきっかけをつくったのは、北朝鮮の研究者でした。

北朝鮮に金錫亨という先生がいて、その先生が「分国論」を発表されました。『日本書紀』に出てくる新羅とか百済のような朝鮮半島にあつたかのような地名は実は日本の中にあつた、日本の中になぜ同じ地名があるかというところ、本國が朝鮮半島にあり、その分國が日本にあつたからで、『日本書紀』がそのことの間係を持ったと書いているのは、日本列島の中にある分國に対する話であるという考え方です。これを「分國論」といいます。一九六三年にその考え方が発表されました。

日本の研究者は猛反発するのです。金錫亨先生の論文は最初、『歴史科学』という雑誌に載った数頁の短い論文だったのですが、三年くらいして『初期朝日関係研究』という著書になります。体系的な内容で、それに対して日本の中で、果たして昔のような考え方というか、その当時の一般的な考え方でいいのかということが反省されるようになってい

ていきます。そこから考え方が変わり始めると言っていてと思います。

実はその金錫亨先生は末松先生のお弟子さんです。京成帝国大学の時代のほとんど最後のお弟子さんで、わたしは金錫亨先生に会って話したこともありましたが、非常に末松先生を尊敬していて、批判的な研究をするのですが、人間関係は非常に良好というか、そういう関係だったと聞いています。学界では、意見は違っても友好な関係はあるので不思議でも何でもないのですが、そういうように立場も違い国も違って、特に北朝鮮はいろいろ変化していきますので、そういう中にあつても師弟関係はずつと変わらずということでした。

わたしも実は、加耶の研究を始めたのは末松先生の『任那興亡史』に対する批判的な検討です。わたしは批判的な論文や本を書きましたが、末松先生の研究は非常に評価できます。加耶の問題についてはわたしはたいぶ批判しましたが、『新羅史の諸問題』とか今でもわれわれが参考するのにも有効な論文をいくつも残しておられます。わたしは大学の卒業論文は『三國史記』に関する論文だったのですが、それを学会誌に発表したときに末松先生に評価していただきました。末松先生も『三國史記』に関する研究をしておられましたので、それを少しでも膨らませることができたかと思つていますが、非常にありがたいお言葉をいただいた

たことがあります。

加耶ですが、さきほど言いましたように小さい国の集まりです。ひとつにまとまることはありませんでした。まとまることなく百済と新羅によって分割されてしまうことになるのですが、その小さな国々は均質、均等ではなく、その中でも強弱、大小、広がりも違うし、人口も違うわけです。その中に有力な国がいくつかあつて、それを中心としていくつかの国々がグループをつくるということがありました。

わたしはその中で加耶南部諸国というものと、それから大加耶連盟という言葉を使ったのですが、大加耶を中心とする諸国連合を措定し、それを軸とした加耶史というものの枠組みを考えることにしました。そういう形で加耶史の研究を進めてきたということです。

加耶史の研究をする際の大きな障害は、史料が少ないことです。今回は文献史料と考古学との関係ということで、加耶史の研究は非常に史料が少ない状況の中で研究しないといけないということがあります。そもそも加耶史だけでなく朝鮮半島の古代史を考えるときには、高句麗でも百済でも新羅でも史料は決して多くはないのですが、その中で加耶は特に少ないと言えます。

そういう史料の少ない中でいかに加耶の歴史を考えていくかというときには、周辺科学、特に考古学の成果に頼ら

ないといけない部分が少なくありません。当然ですが、無制限に頼ることはできないので、しかも考古学の学問的な方法論には限界があるわけです。こちらが頼りたい部分が明らかにできないこともあるので、これは相互にあるわけですが、ですからそういうことを弁えながら、しかし頼らないといけない部分があるという状況です。

加耶は、史料が少ないために個別の国の歴史をたどるとはほとんど不可能です。先ほど言った任那国、別名「金官国」についてはまだいくらかわかると書いてもいいのですが、しかしそんなに詳しくわかるといっていいのです。そういうときに、いくつかの国々がグループをつくってグループとしてどうしたかというふうなことがわかるとすれば、それが非常に有効な加耶史研究の方法になりうるといふ立場です。いくつかのグループがあつて、そのグループのことを考えることはそういうメリットがある。ひとつひとつの国それぞれについてはあまりよくわからないけれども、グループとしてどうしたかという形であればいくらか話ができるということです。

この加耶の地域における発掘調査は、開発もまだ続いておられますので、とぎれることなくあります。韓国の現在の発掘の中心は財団です。日本と同じように研究発掘はほとんどありません。開発に伴って発掘が必要になって発掘するということです。そこからお金が発生して、それを財団

で運営していくというようになっていきます。一昔前は大学の博物館が発掘調査の中心になっていましたが、現在は大学の博物館が調査するのは数カ所くらいで、ほとんどしておりません。むしろその考古学出身者が財団に就職して、その財団が発掘するということになっていきます。それが現在の状況です。

加耶の地域は、今の文在寅大統領が、加耶研究を推進するようにと指示しました。今までの大統領で、個別の歴史を採り上げて言ったことはありません。前の大統領朴槿恵は父親の朴正熙が特に慶州に思い入れがあつて仏国寺の復興をしたりして、それを受けた娘が慶州について特に強く指示したことがあります。そのため新羅の月城という王宮の候補地があるのですが、そこを早く調査しろという形で、それまで調査してこなかった、考古学的な発展がまだ不十分なので発掘はしないということにしてきたところが、大統領の一声で発掘が始まりました。しかも金は出すから五年でやれと言われたようですが、実際には四〇〜五〇年かけるべき発掘です。それが始まりました。

そのようなことはありますが、いまの大統領が加耶研究を推進するように指示し、おかげで国立の加耶文化財研究所にも予算が入って、そのための発掘をせざるをえないという状況があります。ただ、急激にそこだけというのはあまりよいことではないと思います。そういう進め方も一部

あるということにはなりません。

発掘ですが、かつては古墳群の調査が中心で、古墳が残っている状況がよくわかるという事情がありました。マウンドはほとんどなくなつても古墳群があつたことは確認できますからそういうことだったので、それに加えて鉄を生産する、鉄器を作るところや住居、あるいは山城などの古墳以外の調査も行われてきています。そしていま現在、王宮の追究が進んでいます。その王宮の話からまずしていこうと思います。

王宮の候補地がある国が四つあります。加耶の国の中で四つしかないと言わなければならないが、その一つは金官国、任那国です。加耶諸国の中の主要な国の一つが金官国です。これが現在の金海にあつた国です。

先に挙げた地図(図1)で太字で記しているのが加耶の国々です。この地図の中で、上のほうが現在の慶尚北道、下のほうが慶尚南道です。範囲については一定の決まつた考え方ではなく、大きくは二通りあります。慶尚南道を中心とした地域だけで加耶を考えると、慶尚北道まで入れた形で捉えるという考え方があります。古くからこの両方の立場があると言っています。一般的には慶尚南道を中心とした考え方になると思いますが、そこに挙げた国々が加耶の国と言っていると思います。

それを見ていただくと、それぞれが非常に接している

どうか。基本的にはひとつの盆地を中心にして成り立っている国と考えていただいたらいいと思います。金官国も山に囲まれた国と言っているのですが、南のほうは海です。その中心には少し小高い丘陵があります。それを鳳凰台と言います。図2をご覧ください。この国の始祖の神話が残っています。始祖は首露王といいますが、その王の陵とされるものが近くにあります。国立の博物館も近くにありません。この範囲が金官国の大体の範囲です。このなかの鳳凰台が王宮の候補地です。その北に大成洞古墳群があります。これが王の墓を含んでいる古墳群と言われます。このように見渡せる範囲が金官国の主たる範囲と言いうことができます。

このように盆地を中心に成り立っている加耶諸国ですが、それぞれの国を空間的に構成するのはまず古墳群です。それはわかりやすいというか見つけやすいところで、それ以外に山城があります。それから、王宮がなければなりません。それから、一般の人が住む集落はなければならないということになります。これらで構成されるのがそれぞれの国であるということになります。

これを基本的なセットであると言っているのですが、これまでこれらがそろって確認された例はありません。古墳群があり山城もある、ただ山城の年代がはっきりしない。集落があつて生産遺跡もあるところもありますが、やはり問題は王宮が確定できていない。現在は王宮の追究がこれ

までになく盛んに行われている時期と言えますが、まだここが王宮であると確定的に言える段階ではないということです。そうした例を少し見たいと思います。

金官国のあつた現在の金海は朝鮮半島の東南端に位置しています。日本列島からすれば最も近い位置にある国であると言いうことができます。『魏志』倭人伝の前にある韓伝には弁韓の狗邪国として登場します。帯方郡から倭王の卑弥呼のいる邪馬台国までの行程が倭人伝に記されているの

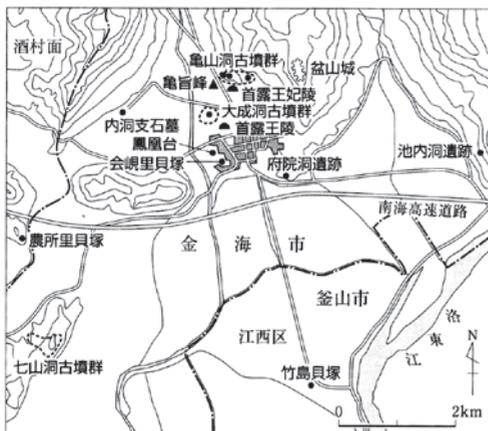


図2 金海遺跡分布図

はご存じの通りですが、朝鮮半島内では帯方郡から出発して西海岸を通って、さらに南海岸を通って東南の端にある狗邪国に至って、それから大海を渡るというふうになっています。

実際にはもつと西寄りのところから対馬に向かったほうがいいと言えますが、しかし狗邪国に寄っている。それが必要だったと思います。帯方郡から狗邪国に至るルートは古くからのルートであると考えられます。魏の使者はそれを利用しただけで、古くから使われていたものと思われません。反対に、日本列島から朝鮮半島に行くうえでも金官国のあつたところが最初の到達点、朝鮮半島の東南端に当たるといふことです。

釜山の国際空港は金海空港といえます。現在空港は、釜山市に編入されたので名実ともに釜山空港なのですが、以前は金海郡に属していました。その空港に降り立つ前に見えるような範囲。中心に鳳凰台があつて、首露王という始祖の王陵があつて、大成洞古墳群がある(図2)。そこを中心とする一带が金官国の範囲であると言うことができまです。ですから、それほど大きくない範囲です。加耶の国々は大体そういうふうな広がりではないといふことが言えます。

金官国にも王がいて王宮があつたと考えられますが、『新增東国輿地勝覧』という、一五世紀の終わりの地理書があ

ります。「新增」というのは増補版で一五三〇年代くらいのものですが、その本には「首露王宮がある」と書いてあり、その跡が当時の金海府にあると書いてあるのですが、では具体的にどこかということとはわからない。そのような状況の中で、先ほど言いました鳳凰台が古くからの候補地であり、そこがそうではないかと考えられてきたのです。

その鳳凰台の発掘調査が進められてきています。すぐ横に貝塚があります。これは韓国で最初に発見された貝塚で金海貝塚と呼ばれています。いまでも貝殻がたくさん残っています。この近くまで海だったということです。鳳凰台の一郭が木柵などで囲まれていたということもわかっています。鳳凰台はそれほど高くはなく、丘陵です。そこを登ると、天を祭る祭壇があります。

鳳凰台に王宮があつたと推定されていますが、まだこれが王宮だと断定できるものはないと見つかっていないという中で、二〇〇二年頃から鳳凰台の周囲の調査で城壁が見つかります。明らかに人工的な城壁です。少し後に反対側でも見つかっています。それを結び推定ラインですが、その後大体これに沿った形で他の地点でも何カ所かで見つかっています(図3)。ですから、鳳凰台を囲む城壁があつたことについては問題はないということになります。

昔から推定で鳳凰台は王宮があつたところだろうと考えられてきて、そしてそれを囲む城壁が確認されているという状

況です。昔から推定に基づいてここが始祖の王宮であろうと言っているのは鳳凰台の上ではなく鳳凰台の下にあります。実はそこで最近、国立加耶文化財研究所が発掘調査を始めています。始めたのは二〇一五年からで現在も続いていますし、これからさらに一〇年くらいは続けないといけないと思います。これは鳳凰台の東側の下です。竪穴住居などは出ていますが、王宮に関係すると思えるようなものはまったく出てきていないのです。これを広げていって



● 鳳凰土城周辺発掘調査現況図

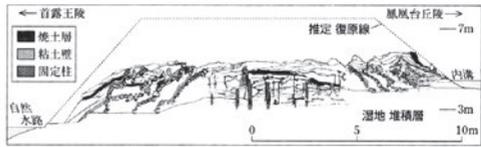


図3 鳳凰土城

とをやるのは国立加耶文化財研究所です。国立加耶文化財研究所はいま、王宮の跡を二カ所で発掘しています。年次計画で何年も計画した形で発掘を進めていて、その一カ所がここです。

現在の海拔二mのところまで水が入っていたとすれば、鳳凰台は海に面していたこととなります。現在は少し海岸から離れています。それは二〇世紀に入ってから、そのまもあって海岸線が遠のいた形になっているため、それま

上のほうに上がっていったらもらえらばと思います。ただ、上のほうは削平もされているので、遺構が残っているかどうかは何ともわからないのですが、ここが一番王宮の可能性が高いところであると考えられますので、発掘は進めていただいでそれに期待するしかないと思います。

ただ、そういう計画で発掘が始まっているということです。先ほど韓国の発掘も研究発掘はほとんどないと言いましたが、一部、研究発掘しているのが国立文化財研究所です。国立の文化財研究所はいくつかに分かれているのですが、加耶のこ

では海岸が近かったということです。金海はそのように海が入り込んでいたということになります。

金官国の港は、その大きな湾の西側で見つかっています。実は鳳凰台の横でも港の跡が見つかっていますが、加耶時代の港というわけではありません。市内のホテルから現在の海岸を望むと、はるか遠くまでほとんど農地になってしまっているのがわかります。

発掘された港は、栗下というところにあります。いまは小さな展示館ができていて、そこに模型が置かれています。その発掘にわたしも一〇年以上前に行ったことがあります。わたしは文献の研究をしているのですが、韓国においてむしろ考古学者との付き合いが多くて知り合いがいまないので、現場を多く見る機会があります。

金官国においては王宮の候補地として鳳凰台があつて、その調査が始まっているのですが、生産遺跡、特に製鉄の遺跡で最もメインとなるはずの遺跡が智士洞というところで、ここに工業団地ができることになって事前の発掘が行われました。周りが山に囲まれているのですが鉄鉞山です。そこは朝鮮時代までずっと製鉄が行われてきたところです。ただ、残念ながら発掘は途中で終わってしまいました。早く開発したいということだったのだらうと思います。

最近、国立加耶文化財研究所で加耶の資料叢書として全七巻の大部の書物が出ました。韓国の国立文化財研究所が

発刊した本はすべてサイトからダウンロードできます。わたしはこの本をもらったのですが、ファイルでも持っています。これが七冊出ているので、資料編があり、戦前の調査編があつて、それから発掘調査資料編ということでその後の発掘について地域ごとに書いています。ただ、そこでは先ほど言った智士洞は取り上げていません。発掘したということも書かれていないところが問題で、わたしはたまたま現場に行ったので知っているとということです。

ただ、古代の製鉄遺構の調査にまでは至っていません。古代の製鉄に関わっていた人たちの墓があつて、その調査までしています。発掘は新しい時代から掘り進めていくことになるので、後の時代の製鉄遺構は調査しています。ところが、肝心の古代の加耶時代の発掘まで行かずにおそらく止められたのだと推測しています。ちゃんとした報告書も出ないままです。略報は出たのですが、それすら取り上げていないことは非常に大きな問題だと思います。加耶の製鉄遺構で一番重要なのはこの智士洞だと思われませんが、そのことを知らない人が多い。製鉄遺構があつたということさえ知らないという状態になっているというのは問題です。

鳳凰台のすぐ北に大成洞古墳群があります。そこは五世紀初めまでしか古墳の造営は行われていません。それは問題なのですが、これは王陵を探すという目的を持って発掘

が始まりました。発掘する前に、慶星大にいた申敬澈教授が王陵探しを始めるということでもわたしも事前に連れて行ってもらって、ここだと説明されました。マウンドは何もない状態でした。そこを調査して、調査している間はわたしも毎年のように行きました。巴形銅器、これは日本製という考えのほうが有力だと思えますが、そのほか日本と関わりのあるものもたくさん出てきました。大きな器台もあり、土器・鉄鋌など遺物がたくさん出ています。

そういう古墳群が近くにあって、さらに背後に山城があります。山城はいまは整備されてしまつて昔の面影はありませんが、山城も発掘されて加耶まで遡るということになっていきます。こうした石築が本当に加耶まで遡るかどうかというのは問題なのですが、山城があり、平地には王宮があるはずで、それに古墳群が加わる、というセット。それがある程度わかつてきつとあるという状況です。しかし、王宮が確定していないので完結はしていない状況と言えるかと思えます。

金官国と並んで有力な国のひとつが大加耶国です。現在の高霊という町にあったのが大加耶国です。『日本書紀』には「伴跋」という名前が出てきます。「伴跋」が固有の名前です。大加耶というの「偉大な加耶」であるということと他の国から呼ばれた尊称というか美称というかそういう名前です。金官国も「大加耶」と呼ばれた時期があり

ます。この大加耶とは時期が違いますが、早い時期に大加耶だったのは金官国で、後の時代に大加耶になったのは伴跋国であるということになります。

後の時代の大加耶をここでは大加耶と呼んでおきますが、大加耶も盆地にあります。すぐ背後に古墳群がありますが、それが加耶で最大とされる池山洞古墳群です。やはりこの範囲が大加耶国の全体と言えます。その中にある主山という山の稜線から伸びてくる先端部分に王宮の候補地があります。丘陵の先端部です。昔からこれも、大加耶国の中心だったところということで碑が建っています。いまでも丘陵の上に建っています。

延詔里という地名で、山から伸びた先端部のところに延詔土城と呼ばれるような土城があるのではないかとこのことで、ここが王宮だろうという推定に基づいて、二〇〇〇〜〇一年に慶北大学の朴天秀教授が王宮探索の一環として発掘をしたことがあります(図4)。わたしも行きました。しかし、王宮らしいものは見つからなかったというか、その上の部分はほとんど削平されてしまつていて痕跡はまったくない状況でした。斜面で大壁建物が出たくらいで、めぼしいものはあまりないという状況で発掘は終わりました。ところが最近、丘陵の周りから城壁が見つかりました。先の延詔土城と推定されるものとは別です。これもぐるっと囲んでいる全体の状況まで明らかになつたわけではあり



歩き回って見つけたスラッグが展示されています。大加耶の北の山で美崇山という山がやはり鉄鉱山です。その大加耶側でこういうものが拾えます。

つまり、製鉄遺構は大加耶側にあったことが想定できるのですが、まだ発掘調査はされていません。製鉄遺構があることはほぼ間違いないと思われます。美崇山の南側です。反対側には冶爐という地名が現在もあつて、そこでも後の時代になって製鉄が行われてそういう名前になっていますが、古代においては反対側の大加耶側で製鉄が行われていたと考えられます。

王宮の候補地は四つあると言いましたが、三つめは安羅国です。現在の慶尚南道咸安というところが中心になります。真ん中に末伊山古墳群という大きな古墳群があり、周りを山に囲まれた盆地です。王宮の候補地は古墳群の北西で加耶里にあります(図5)。国立加耶文化財研究所が発掘を始めています。

丘陵の下は公園みたいになっていて、池があります。これはもともと池だったわけではないのでなぜそのようにしたのかわかりませんが、そこから農地が少し盛り上がりがあることが知られていて、それは土塁の痕跡と考えられてきました。その発掘を二〇〇八年にウリ文化財研究院という財団が行って、基底部が見つかりました。地上部はほとんど削平されてしまっているのですが、発掘すると基

礎の構造が見つかって、発掘を担当したウリ文化財研究院は高麗時代の堤防ではないかと言っているのですが、これを王宮を囲む城壁と考えていいと思います。

そして、それが囲んでいると思われる丘陵の高いところをいま発掘しています。ここでもまだそれらしい遺構が見つかってはいないのですが、これも今後期待される場所です。そこからは末伊山古墳群がよく見えます。こちらはまだ王宮とみられるもの自体が見つかっていない段階ではないということです。ここで、他と同じような状況です。

最初に話した金官国の鳳凰台もこれから発掘が始まりますし、安羅国については丘陵上部の発掘が続いて

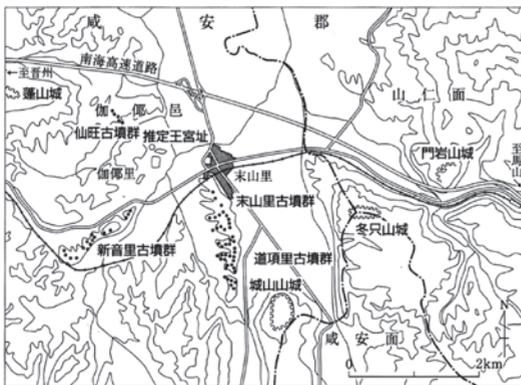


図5 咸安遺跡分布図

いますので、これから期待されます。

もうひとつの王宮候補地は多羅国です。これは現在の陝川というところになります。陝川郡の中に双冊面というところがあつて、そこに玉田古墳群があります。その古墳群のすぐ近くに城山土城があります。そこが推定王宮地です。

この土城は、最初は二〇〇九年に慶尚大学の博物館が発掘しました(図6)。そのときにはこれから王宮候補地を発掘するというので、わたしも現地に行きました。その後、東西文物研究院という財団がそれを引き継いで城内の発掘を進めています。丘陵を囲む形で土塁があります。城内では大壁建物の跡も出ています。ただ、これが王宮であると言えるものは出ていません。古墳群のすぐ横にあつて土塁がつくられていますので、候補地としては有力ではないかと思われ

ますが、まだそこまではいっていません。城壁にいくつかトレンチを入れて断面調査をしています。版築とは言えないのですが、人工的なもので、加耶以外の遺物は出ないということです。ほかの箇所の断面調査では、新羅の時代に加えた石築もあります。すぐ近くにある玉田古墳群は、多羅国の王陵と考えられる古墳群で、整備されています。先ほどの大部な叢書の中で、玉田古墳群の発掘の歴史を書いた部分がありますので資料に添付し



図6 多羅国城山土城位置図  
(調査地域とあるのは玉田古墳群)

ましたが、その年表をみていただくと、ここでの発掘調査は、一九八五年から始まっています。わたしも始まってすぐに見に行きました。一九九四年まで継続していました。土城の調査はその後です。

加耶の古墳は基本的には竪穴式または竪穴系横口式といわれるもので、横穴式石室は少し後の時代です。その大型の古墳が玉田古墳群の中にあります。中心的な大きな古墳は五世紀後半頃のものになります。玉田古墳群の場合には中心的なものをかなり発掘しているのですが、大加耶の池

山洞古墳群では一番大きいクラスの古墳は発掘していません。そのため、単純に残された遺物だけでは比較・判断できないと思います。

というのは、玉田古墳群のほうが遺物が多いので勢力が大きかったのではないかと考えがありますが、玉田古墳群では主要な古墳がすべて発掘されているのに対して、大加耶国の山洞古墳群では主要な古墳を発掘できていないという違いがあるのです。そう単純ではないということです。

王宮がどこまで調査されているかという話をしました。四つの国の候補地があるという状況の中で、現在のところはどれひとつも明確にはなっていないのですが、しかし継続しているのが安羅国と金官国で、それについては今後十分に期待できると言っているかと思えます。

次に連盟論と文化圏という項目で、加耶史に対するわたしの考えを少し申し上げておきますと、まず「連盟論」と言っていますが、加耶の歴史を前期加耶連盟、後期加耶連盟という形で説明しようとしたのが金秦植という韓国の加耶史研究者です。

加耶は先ほど言いましたように、ひとつにまとまることなかったのですが、いくつかは連合することがあります。そして、それを「連盟」と呼ぶことが多いのです。金秦植も「前期加耶連盟」「後期加耶連盟」という形で呼ん

でいます。わたしはこの考えに反対なのですが、前期加耶連盟・後期加耶連盟の考え方は、前期においては金官国を中心として加耶諸国が一体、ひとつの連合をつくっていた。後期加耶連盟は大加耶国を中心として全体がひとつになつていったという考え方です。

わたしはひとつにまとまることがなかったと言いましたが、前期であろうと後期であろうとひとつのグループになつたことはないという意味です。加耶の歴史はむしろそういう形で見ないといけないと考えていますので、金秦植の考え方は金官国あるいは大加耶国を中心にひとつにまとまっていたというところが問題です。金秦植は初めてと言っているくらい『日本書紀』を加耶史研究に利用した韓国の研究者です。それまで『日本書紀』はあまり使われなかった。「任那の官家」という主張をしている『日本書紀』は扱わない。あるいは、北朝鮮の金錫亨のようにまったく違う理解がありました。一般的には『日本書紀』から離れたところで考えることが多かったと言っているかと思えます。

しかし、『日本書紀』を使わないと加耶史の研究はできないのです。加耶史の史料は多くないと言いましたが、その多くない中にくらか残っているのが『日本書紀』なのです。ですから、『日本書紀』をいかに使うかということが加耶史の理解につながるのですが、それを避けてきたと

言っている。それに本格的に取り組んだのが金泰植です。彼が、後期の加耶は大加耶を中心にした諸国連合であると主張しました。

わたしは、それを全体の連合であるとは考えない、それには反対ですが、しかし大加耶を中心にした諸国連合があったということは認めていいというか、それを軸にして考えるべきという立場です。その辺に違いがあつてわたしは「大加耶連盟」と言っています。

『三国遺事』という本には、加耶についてまとまつた記述があります。「駕洛国記」という項目で、実際に『駕洛国記』という現在は伝わらない本を、ほぼ引用しています。『三国遺事』は末松先生がここ学習院東洋文化研究所の学東叢書として一五二二年の版本を影印したものを手軽に入手できるような形で刊行しています。『三国史記』も一五二二年版本が残っていて、その影印本が手軽な値段になつていると思いますが、それが基本的な史料です。

その『三国遺事』の中に加耶の史料があります。『三国史記』よりむしろ『三国遺事』のほうに加耶の史料は多いと言つていいのですが、ただ、そこに書かれているのは五伽耶であり、あるいはもうひとつ加えた六伽耶という表現で、五つあるいは六つの国の名前があがっています。ただし、それが連合体を示しているということにはなりません。よくそう考える人がいるのですが、そうは言えない。五伽

耶・六伽耶といっても五つ・六つ国名が並んでいるだけで、それらが連合体である、それらが何らかの形で結びついている、関わりのある国々である、ということを示明ししなければ連合体と言うことはできないわけです。

そういう中で、『三国遺事』の中に「浦上八国」という海岸にある八国の記事があります。それについては連合して戦争するというように書いているので、連合体を形成していたと言つてもいいと思いますが、ただ年代的には問題があります。それらとは違った形で、金泰植は前期は金官国を中心にするすべての国が一体となるような諸国連合があつたと考えているということです。

わたしは金泰植の大加耶国の成長に関する研究、主に『日本書紀』を使ったそれまでにないような研究に導かれながら加耶史の研究を始めましたが、全体的な連盟は想定できないという立場です。そこが大きな違いであるということです。韓国の考古学界でもわたしの使っている「大加耶連盟」といった言葉を使うのですが、それは金泰植の考えと同じものだという捉え方がずつとありました。何が違うかという点、全域ではなくて大加耶を中心とする一部だけという違いがあるのですが、そこがようやく理解されるようになってきたと思います。全体がひとつということではなく、その中のいくつかの国の連合体であるという考え方です。

そして、そうした連合体があつたということは、限られた文献史料を通していくらか言うことができると思つています。大加耶というのは五世紀の半ば以来、百済の強い影響下にありました。それが四七〇年代、百済自体が高句麗の攻撃を受けて弱まっていきます。それによって大加耶国に対する影響力も弱まっていくことです。そういう時期に大加耶を中心とした諸国連合が形成されたと考えています。

その大加耶では嘉悉王という王が出て、四七九年に、すでにできあがっている連盟諸国を通じて外海に出ます。通つたのは蟾津江という川です。大加耶国の近くにあつたのは洛東江という川ですが、この河口に金官国があります。中国の揚子江の下流に都のあつた南斉という国に「加羅国」が使者を送っている記録があるのですが、送つた国は大加耶国と考えられます。大加耶国は内陸なので、まず海に出ないといけないのですが、出たのは蟾津江を経由してその河口の海岸であろうということです。つまり、その間に通る国々は連合体を形成したと考えられます。

一方で洛東江という川には別の勢力があつたと考えられます。金官国、安羅国というのは少し対立的な国々であったので、そこを通過していったはずはないということになります。そういうことで、西側の諸国が集まつた形での諸国連合ができていたと言うことはできるのですが、その政

治的なグループでは高霊タイプと呼ばれる独特の土器が分布する範囲と重なっています。

高霊タイプと呼ばれる、大加耶国から出ると似たような形の土器が出る地域、それは土器の文化圏と言えるものですが、その広がりには蟾津江という川の河口に向かつていくルートに沿っている国々と重なります。

図7に示している範囲がわたしのいう大加耶連盟の国々ということになります。政治的な地域と、先ほどの高霊タイプ土器の出るところである文化圏が重なる、それは文化圏にとどまらず政治的な結びつきのある国々であると言ふことができます。もちろんそれは土器の分布だけでは言いえない話です。土器の分布がどうなつていようと、それで政治圏が言えるわけではない。それが政治的なつながりのある国々であるということは、文献を通して言うしかないのです。

大加耶を中心とする諸国連合については、それがあつた程度言えるのでこういう形で説明しています。ここに示している図は、そうした大加耶の文化圏が蟾津江よりさらに広がった形で全羅道まで広がっていた。順天という町がありますが、そこにある古墳からも高霊タイプの土器が出たり、北のほうでは全羅北道の長水とか任実といったところでも高霊タイプの土器が出ている。単に高霊式の土器が出るというだけではだめですが、それが副葬される中の主たる

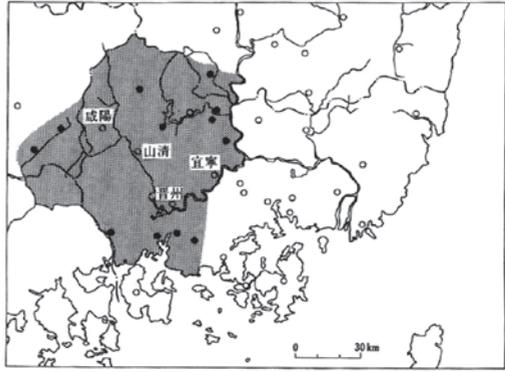


図7 大加耶連盟の地理的範囲

●は于勒十二曲とされた国名。

スクリーン・トーンをかけたところが、およその大加耶連盟の範囲

土器になつている。一点、二点がよそから流入した状態ではなく、それが中心をなすようなあり方ということが必要ですが、そういう意味の文化圏として少し広がりを持つようになつてきたということです。

ですから、それだけで政治圏と言うわけにはいきませんが、しかし先ほど言ったような形で文献をもとにして考えることのできる政治圏とかなり重なつて、それが少し広がるような感じになつていくということです。

それ以外に、小加耶式土器の分布圏があります。先ほど紹介した加耶の資料叢書という加耶文化財研究所が出している発掘調査資料の一卷に、小加耶式土器の分布の図があります。細かい地名を確認しないといけません、小加耶式土器が分布する範囲がある程度の広がりを持つているのは確かです。それがひとつの文化圏であることは間違いない。そういう広がりがある文化圏ということになります。

それでは、小加耶は小加耶国を中心とするひとつの連合体であると言えるかどうかということになると、それは土器の広がりだけからは言えない。土器文化圏であるということは間違いなく言えるのですが、政治的なつながりかどうかということは文献なしでは考えることはできないということです。どのような考古遺物が出ようと、政治的なつながりを示すには弱いと言つていいでしょう。政治的なつながりを示すものもないのでゼロとは言いませんが、連合体があることを示すと文献史料がある程度そろつていないと言えないということになります。その辺が方法の違いです。

小加耶地域はどうかというと、最終段階である六世紀半ばくらいにはこの地域からも高霊式の土器が出てきます。中心古墳からも出ています。それがこの政治圏に含まれると考えることができそうな文献的な材料もありますので、わたしは小加耶も最終的には大加耶連盟に入ったという形

で考えています。

大加耶国の中心は池山洞古墳群です。先ほども言いましたように、ここでは一番大きい古墳群が高いところに並んでいます。ただ、この一帯は発掘されていなくて、一段低いところが発掘されたことがあるだけです。この地域の発掘は一九七七年に始まっています。加耶の調査においては最初に行われたのがこのあたりと言っていていいと思います。その翌年、その下の三二―三五号墳が発掘され、わたしが見た発掘調査はそれが最初でした。池山洞古墳群では、頂部の大きな古墳は発掘されていなくて、少し下の四四・四五号墳が発掘されたのが一九七七年です。

時代でいうと五世紀の後半くらいかと考えられ、その時期の王墓である可能性は十分にあると思います。池山洞古墳群は、それから後も、ごく最近も発掘されています。ただ、上のほうの大きな古墳ではなく七三―七五号墳など、博物館のすぐ横で発掘が行われています。このあたりは断続的ではありますが最近まで古墳の発掘が続いていると言えます。加耶の古墳群としては最大の古墳群ということで世界遺産にもなりました。

整備していく過程で調査せずに整備してしまうところが増えていきます。四四号・四五号では、殉葬が非常に多いことが確認されています。

加耶の資料叢書には、大加耶式土器、これは先ほどから

高霊タイプ土器と言っているものですが、それと耳飾りを取り上げて大加耶圏域を示した図もあります。朴天秀教授が作っています。文化的広がりということは間違いないのですが、それに政治的なつながりがどう重なるかということが問題です。土器を通して、あるいは土器以外のこうしたものを通して文化圏は想定できるということですが、それをどのようにとらえるか、ということが文献研究の課題です。そういう情報が増えてきていることは間違いないと言えます。

先ほど、「浦上八国」という南のほうの海岸にある国々について連合体と考えることができる、そういう可能性があると述べました。実はそのなかに小加耶にあたる「古自国」が含まれます。『日本書紀』では、「久嗟（古嗟）」と表記しています。その名前はいわゆる「任那復興会議」にも登場してくるのですが、最終段階ではその国からも高霊タイプの土器が出てくるようになるということがあります。その前には別の政治圏があったということは十分に考えることができます。

もうひとつ、比斯伐文化圏という別の文化圏があり、現在の昌寧というところが中心となります。その地域の広がり或少し言いますと、昌寧地域では校洞・松峴洞古墳群が中心古墳になります。これが最大の規模を持った古墳群で、そこが中心であろうということは容易に判断できると言え

ますが、文化圏としてはその最大古墳群だけでなく、それより南の桂城面というところにも古墳群があり、あるいは霊山面というさらに南のところにも古墳群があります。これらの発掘調査もされています。

現在も桂城や霊山は昌寧郡に含まれているのですが、比斯伐国の中心が北にあつて、それより南の別の古墳群を持つている勢力まで含んだ形で政治圏を捉えることができるかどうかという問題があります。これはひとつの国として国の中での勢力の違いとして、中心となるのは北のほうの校洞・松峴洞古墳群の勢力であり、その下に位置するのが他の古墳群の勢力であるというようにとらえることもできるのです。

ということは逆に、考古学的な材料を元にしてその国の広がりといったものを考えることができるということにもなりますが、その問題も文化圏と文化圏のつながり、あるいは文化圏そのものと政治圏とのつながりをどういうふうに捉えるか。あるいは、その範囲の中でつながり方をどう捉えるかということ、文献を通して考えるしかないような問題であると言えることができます。逆に、考古学的な材料がないとそういうレベルまでわからないということでもあるということになります。

ちよつと中途半端な形でしかお話できていませんが、その辺は実際の課題でもありまして、これから政治圏と文化

圏のつながりをもう少し具体化していく必要があると思います。王宮の追跡・追究もそうですし、それから、そうしたひとつの国単独ではなかなか話せないことが政治圏としてグループがあるという形で説明しやすくなるのですが、それを示す形の考古学的な資料がどういう形で活かせるか、使えるかということが課題であるということになるかと思えます。そのあたりのことについていくらかご理解いただければと思います。時間になりましたので、この辺にしたいと思います。

(了)